

調羹手。休向太平嘆白頭。其一

詩中日字複出。然其一係地名。似不妨。

欲曙城中肅不喧。滿街車馬若雲屯。萬川水碧春無限。四野草青雪有痕。自抱鶯才人臥病。幾隨鳳字客過門。今朝勸醉三杯酒。先對妻孥說國恩。其二

高城日出漲紅塵。飛蓋追隨知幾人。北斗星移天地改。南枝梅發古今新。朱門說客雞三足。絳縣老翁麥六身。衰病讀殘方朔史。好將翰墨樂青春。其三

大馬齒七十三。故第六用絳縣事。

一、キモリに毒無し

余山翠堂下泉水出。清冷可愛。而水石之間。多生四足丹腹之蟲。狀類蜥蜴守居而非是。俗呼守居キモリ而未詳漢名如何。恐有遺毒之憂。捕而弄之。隨生莫如之何。按中村楊齋訓蒙圖彙。貝原損軒和爾雅。以蠐螬當之。然蠐螬守居一名にしてキモリには不當。是以質諸博物人內山覺中。覺中云。蜥蜴一名石龍子。是トカケ。蠐螬一名守居是キモリ也。キモリ漢名龍盤魚也。石龍。守居。龍盤三種一類而別物也。唐段公路北戶錄云。龍盤魚。皆四足脩尾丹腹。狀若守居。游泳水濱。

人莫敢犯。方密氏通雅。及物理小識亦載之。而能毒功用未詳之。此方關東人或食之。乃知無毒也。因云。駿河州浮島原有二草。俗呼河原ブス。甚有毒。人誤啣之。忽死。蓋ブスは附子の俗稱也。是偶然にして毒草の名を呼べり。顧ふに守居の俗稱も、亦自然に無毒の一證歟と云。

一、神主祭祀の儀等室鳩巢來狀

三月七日先生手書之内

頃日榊原式部大輔殿も參府にて使者など給申候。神主祭祀の事、其後も姫路より疑問に被及候て、文公家禮の趣委細吟味候て毎度申來候。當年二十三四にも成被申人と承申候。餘程深切成志有之と見申候。最初の疑問は、返答別紙に著し遣申候。其後は別に著し候事、手痛候て難成候故、あなたの紙上に朱にて批答いたし遣申候。其最初の答書は、此方にも下書留置候。孝七郎なども達てかり候て寫取申候。是はいかさま以後考の助にも可能成物と存候。貴殿なども、か様の事及相談申衆、其御地にも可有と存候。左様の御時分の心得にも成可申間、其元へも進候て爲見可申候。是も玄眞被歸候時分可進候。

一、内々申入候山宮源之允も、明八日當地發足致上京候。

何とぞ京にて學文増進、第一學文の筋取そこなひ不申様にと存候。拙者送別の詩、紙末に書付進申候。

花落鳥啼欲晚春。超々客路遠遊身。帝京到處多行業。莫做五陵年少人。

千里求師務學哉。古今輕俊少成材。紫陽一語應須記。豪傑還從戰慄來。

一、伊藤齋宮の儀等室鳩巢來狀

戊四月九日御手書

私當年歲初並去年歲暮の作、御覽被成候由。但朱門說客の一聯、少し諷意も有之様に被思召候由。成程少し存寄も有之候。但其は世上講説の客、朱門へ出入致し申事にて候。

拙者諷意は偏勞黃閣の一聯に有之候か。如此太平全盛の時
に候へば、調羹の手際を待申計に候。黃閣は漢の時分宰相の所居にて候。調羹は說命に若作和羹。爾惟塩梅の意より詩に調羹と用來候。變理陰陽の意にて候。

伊藤齋宮開講の節、貴様へ申談の趣、又は劣甥へ申談候事など承申候。其節委細の様子被仰下候へ共、此方より何共不申進候事被仰越候。其節致失念候か、又は要事にても無之候故、心頭に不懸事故申殘候か。畢竟名聞の致候方に御座

候へば盛に成候ても、風教の益には存じも不寄、其上續き申間敷奉存候。都講・執席等の諸役者相定候事は、勝手次第不苦儀にも存候得共、かやうの儀にて聲聞を主張致候心得にて候へば、彌見ぐるしく存候。伊藤事、よほど文才も有之候へ共、俗儒の氣習を脱し不申氣の毒に候。畢竟斗筭の徒何足算也。僉議にも不及事に候か。當地にても齋同事の儒生多く、只今老夫少し當地にて人も信向仕候に付、老夫門に成申度よし申入、又は一見を求申者有之候得共、其心底皆老夫一言の許譽を求申心得にて、道義の筋にては無之候。何方も學風衰敗嘆敷存候。委細申上度候得共、手振ひ筆難廻候間、艸々如此御座候。以上。

四月九日

一、榊原式部大輔のこと室鳩巢來狀

明大地元へ御誓之内

郡氏便に榊原家への答書二冊進候。御覽可有と存候。内々の神主も題書致し遣申候。其禮とて先日私宅へ來駕、太刀目録など持參にて候。申置被歸候心得にて、口上書懷中にて自身私家來へ渡し被申所へ、拙者も式臺迄罷出始て逢申候。二十四五に見え申候。篤厚成る生付聞え申候。英氣可